

# 発達障害児の理美容におけるニューロロジカルレベルの有効性 ー訪問美容 Peace of Hair（ピースオブヘアー）の実践事例からの一考察ー

南 多恵子  
赤 松 隆 滋<sup>1</sup>

## I. はじめに

発達障害児<sup>2</sup>の生活の困難の1つに、理美容（以下、本稿では「カット」とする。）がある。椅子にじっと座ってられない、暴れる、バリカンの音が苦手でパニックになるなど、理美容店に行くことができないため、保護者が自宅でカットする。ただし、暴れる子どもを押さえつけて切る、寝静まってから切れる場所だけ切るという方法で対処している場合もあり、このような形で髪を切られることは苦痛を増幅させることにつながり、理美容店に行く機会なく子ども時代を過ごしてしまうことで、成人してからも行けないままになってしまう場合もある<sup>3</sup>。

発達障害の複数のタイプのうち、障害の種類を明確に分けて診断することは大変難しく<sup>4</sup>、その特徴には非常に個人差があることが知られている。だが、主な特徴として、「支援者のための地域連携ハンドブック～発達障害のある子供への対応～」(2013)によると、以下の点が示されている。(1) 愛着が育ちにくい、(2) 生活リズムが乱れやすいことがある、(3) 身辺自立が遅れやすいことがある、(4) 「仲良し」が上手くできにくいことがある、(5) 不安が強いことがある、(6) かんしゃくや八つ当たりが強いことがある、(7) やる気や関心があると能力が倍増、の7点である。(3)の身辺自立に関しては、歯磨き、洗顔、入浴といった日常生活にみられるとされ、そこに理美容の文字は出てこない。ニーズは高くとも、潜在化しがちなのである。

こうした悩みに応えようと、美容室「ピースオブヘアー」（代表：赤松隆滋、京都市伏見区）では発達障害児のカットに対応し続けている。ピースオブヘアーでは、発達障害児のカットを「スマイルカット」と名付けて事業化し、2010年7月～2015年8月末まで5年間で954件もの依頼を受け付け、カットの実践を積み重ねてきた。当初は、保護者が苦心されたのと同様、

カットには困難が伴ったが、現在では約9割は成功している<sup>5</sup>。

「スマイルカット」のあり方は、主に、ABA (Applied Behavior Analysis)、つまり応用行動分析の手法を参考に発展させてきたものだ。第1段階の「Welcome Message (ウェルカムメッセージ)」から始まり、第2段階の「見通しを立てる」、第3段階の「応用行動分析の理論を用いる（行動契約）」、第4段階の「Feedback (フィードバック)」というプロセスをたどる。筆者らは昨年、「発達障害児をめぐる理美容に関する研究：美容室ピースオブヘアーの取り組みに焦点を当てて」<sup>6</sup>にて、理美容師側からみた困難性や応用行動分析に基づいた実践を取りまとめている。

この4段階あるプロセスの中で、カットを可能たらしめるためには、最初の入り口の第1段階「Welcome Message (ウェルカムメッセージ)」がうまくいくかどうかが鍵であり、そこがうまくいけば次の段階への扉が開く。この第1段階「Welcome Message (ウェルカムメッセージ)」をスムーズに運ぶためのポイントを追求することは、ある意味、極めて重要ではないだろうか。筆者<sup>7</sup>は、応用行動分析に加えて、新たな手掛かりとして、ニューロロジカルレベルという考え方が有効ではないかと仮説を立てた。

ニューロロジカルレベルとは、人の意識の論理的な階層構造という意味で、ビジネスや人間関係の向上・改善のため用いられている NLP (Neuro-Linguistic Programming) (神経言語プログラミング) のフレームである。ここでいうフレームとはものの見方という意味を持つ<sup>8</sup>。子どもをカットしようという時、望む成果を出すための課題や解決策、具体的な取り組みが明確にできれば望ましい。そうなれば、このフレームを活用することで、実践の一助とすることが可能ではないか。

そこで本稿では、同店の実践を軸にしながら、発達

障害児のカットをよりスムーズにするための理美容のあり方を探究し、ニューロロジカルレベルに照らして考察していきたい。

## Ⅱ. ニューロロジカルレベルの概略

### 1. ニューロロジカルレベルに関する先行研究

国立情報学研究所の検索サイト CiNii によれば、ニューロロジカルレベルで検索して出てきた論文は1件であった。だが、ニューロロジカルレベルの上位概念である NLP（神経言語プログラミング）をキーワードとして検索すると13件あった。表1は、その論文タイトルをまとめたものである。ここからは、NLP（神経言語プログラミング）は心理・医療やビジネスの領域において活用が試みられている手法であることが伺える。

本稿では、NLP（神経言語プログラミング）のニューロロジカルレベルを活用した取り組みが有効であるこ

とを、スマイルカットの実践例で明らかにし、その課題についても指摘する。

### 2. NLP（神経言語プログラミング）とニューロロジカルレベル

#### ① NLP（神経言語プログラミング）とは

NLP（神経言語プログラミング）は、1970年代、当時カリフォルニア大学言語学助教授であったジョン・グリーンダーと心理学科の大学院生であったリチャード・バンドラーによって生み出された心理療法である。2人は、世界の3人の卓越した心理療法家—ゲシュタルト療法の創始者、フリッツ・パールズ、“家族療法のコロンブス”といわれた米国の家族療法家、ヴァージニア・サティア、米国の医療催眠療法家、ミルトン・エリクソン—のもとを訪れ、3人がどのようにして患者、クライアントに対応しているのかをつぶさに研究した。3人の心理療法家たちの驚くほど似通ったパターンに注目し、そこから彼らの行動をモ

表1 NLP（神経言語プログラミング）をキーワードとして検索した論文タイトル一覧

論文タイトル	出典
災害・事故後の PTSD に対する神経言語プログラミング (NLP) による治療経験	広島医学 65 (8), 561-564, 2012-08
ラフター（笑い）ヨガの集団心理療法としての可能性：ラフターヨガからセラピューティックラフターヨガへ	笑い学研究 (17), 75-82, 2010-07-10
NLP (Neuro-Linguistic-Programming 神経言語プログラミング) を用いた心理的アプローチ（一般演題，第46回日本心身医学会近畿地方会演題抄録）	心身医学 50 (5), 408, 2010-05-01
Nursing Lecture (41) 神経言語プログラミングの実際とケア—医療現場で使われる NLP	月刊ナーシング 27 (7), 102-109, 2007-06
交流分析と NLP (神経言語プログラミング：両者の理論的特徴とその活用 (第一報))	プール学院大学研究紀要 43, 113-126, 2003-12
問題解決志向型アプローチが奏効した腹痛発作を繰り返していた1例	日本心療内科学会誌 7 (1), 13-17, 2003-02-20
交流分析と NLP（神経言語・プログラミング）：両者の理論的特徴と臨床への応用	テオロギア・ディアコニア = Theologia Diakonia 35, 75-90, 2002-03-01
根拠のない不安及び原因不明の腹痛を訴えるクライアントに対する催眠アプローチ—NLP（神経言語プログラミング）技法の併用によるエリクソン催眠の実践	臨床催眠学 3, 22-27, 2002-03
過敏性腸症候群（子どもの心のケア -- 問題を持つ子の治療と両親への助言）—（各論 子どもの心への対応）	小児科臨床 54 (-), 1359-1366, 2001-07
交流分析と NLP（神経言語・プログラミング）：両者の理論的特徴と臨床への応用	テオロギア・ディアコニア 35, 75-90, 2001
神経言語プログラミング (NLP) を活用した「部下との新しいコミュニケーションの持ち方」(3・完) グループ・ファシリテーター研修	企業と人材 33 (743), 34-39, 2000-03-20
神経言語プログラミング (NLP) を活用した部下との新しいコミュニケーションの持ち方 (2) GOALS 研修	企業と人材 33 (741), 50-55, 2000-02-20
神経言語プログラミング (NLP) を活用した「部下との新しいコミュニケーションの持ち方」(1) ペーシング & リーディング研修	企業と人材 33 (739), 60-65, 2000-01-20

デル化し、スキルとしてまとめたものがNLP（神経言語プログラミング）である。

人は、神経システム（視覚、聴覚、体感覚、味覚、触覚といった五感）を通して世界を認識する。それが人の中に体験を作りだす。そして、その体験は言語に変換されて、その言語を通して人は世界を認識することになる。また、その言語を使って新たな体験することになる。その言語化、言語を使っての体験の仕方などのことをプログラムと呼ぶ。こうした神経システム、言語、プログラミングの関係を解明していることから、NLP（神経言語プログラミング）という名称がついた。

## ② ニューロロジカルレベルとは

ニューロロジカルレベルとは、NLP（神経言語プログラミング）の研究者でNLPユニバーシティを主宰するロバート・ディルツがまとめた人の意識の論理的な階層構造のモデルをいう。ニューロロジカルレベルでは、人の意識を環境、行動、能力、信念・価値観、自己認識、スピリチュアルの6つに分けている。

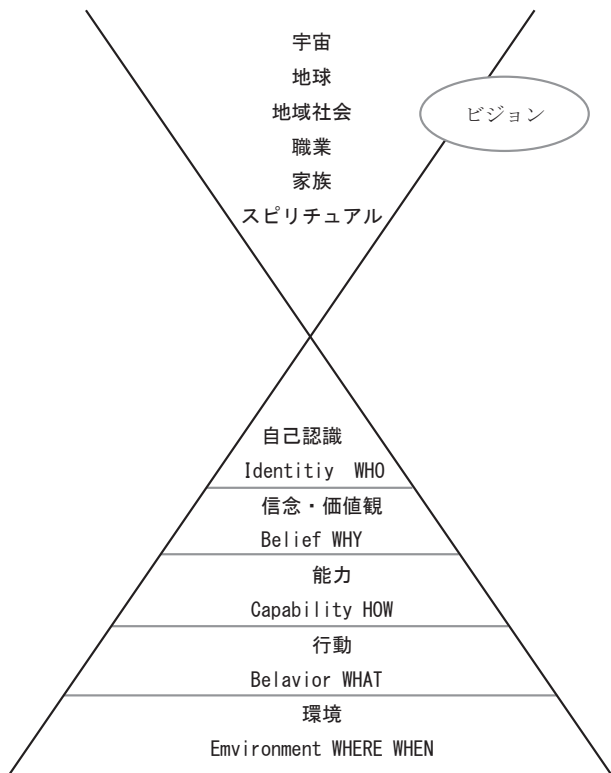


図1 ニューロロジカルレベル

### 1) 環境 (Where, When)

環境とは、いつ、どこで、に関する意識レベルである。例えば、そこに何があって、周囲には誰がいるのか？どのような音が聞こえているか？ 時間も環境要素の1つであり、今何時なのか、季節はいつか、仕事やプロジェクトの全体スケジュールのどこなのか？などが含まれる。

### 2) 行動 (What)

特定の行動・振る舞いに関する意識レベルである。例えば、今自分が何をしているのか、本を読んでいる、友達と話している、音楽を聞きながらご飯を食べるなど、同時に複数の行動をとっている場合も含む。

### 3) 能力 (How)

能力のみならず技術、リソースといったものも含む。自分はどういう能力を発揮しているのか、ということで、例えば、話すためには声の出し方、音楽を聴くための機器類の操作を知っている、さらにまだ発揮していない秘めた能力も含まれる。

### 4) 信念・価値観 (Why)

信念・価値観とは、自分が価値を認めているもの、大切にしていること、信じていることに関する意識レベルである。それは「崇高な信念」に限らず、「ちょっとした思い込み」も含まれている。例えば、「女はおしとやかでなければいけない」「男は人前で泣いてはいけない」等もそれにあたる。この信念・価値観は、動機にもなり、行動を制限する要因にもなる。

### 5) 自己認識 (Who)

自分は誰なのか、自分の存在理由、目的、使命、役割を意識すること。例えば、会社では営業という役割であったり、上司や部下でも、家族の中では親や息子であったりする。一人の人間は、いくつもの役割を持っている。

### 6) スピリチュアル

個人としての意識を超えた意識レベルのこと。その領域は、下位の階層から列举すると、宇宙、地

球、地域社会、職業、家族などを含む。自分は、自分を越えたより大きなシステムの一部（サブシステム）であるといった感覚のレベルであり、神や仏といった宗教に対する意識もここに該当する。

また、ニューロロジカルレベルの特徴をもう1点挙げるとすれば、環境（Where, When）、行動（What）は目に見えるものだが、その他は目に見えないものということである。これらの意識レベルを区別せずにコミュニケーションを行っていると、コミュニケーションの行き違いを招きやすい。コミュニケーションに関するレベルは1)～5)が該当し、次節で表すカットには6)のスピリチュアルは省いている<sup>9</sup>

### 3. ニューロロジカルレベルと発達障害児の理美容の関係

NLP（神経言語プログラミング）では、ある人が問題を抱えている時に、ニューロロジカルレベルのどの段階にあるのかをはっきりさせる。当人の信念・価値観の意識レベルの問題なのか、環境の意識レベルなのかを具体化させるのである<sup>10</sup>。

ある発達障害児が美容院でカットができないという問題について、以下の区別化ができるのではないかな。コミュニケーションの意識レベルである環境から自己認識までの5つのレベルを使い、表2ではカットをする理美容師側から区別化を、表3では子どもの側から見た区別化を試みている。

表2 理美容師の側からの区別化

1	環境	おしゃれできれいな美容室に来ている。
2	行動	暴れる、パニックを起こす、奇声をあげる、椅子にじっと座ってられない。
3	能力	発達障害の子どもは美容院でカットできない存在である。
4	信念・価値観	発達障害の子どもは不衛生でも髪型等スタイリングにも無関心に違いない。
5	自己認識	発達障害の子どもは問題がある子どもだ。

出典：南、赤松（2014）「発達障害児をめぐる理美容に関する研究：美容室ピースオブヘアの取り組みに焦点を当てて」『京都光華女子大学研究紀要（52）』に基づき、筆者作成。

表3 子どもの側からの区別化

1	環境	発達障害の子どもは日常とは異なる不安で不慣れな場所にいる。
2	行動	暴れる、パニックを起こす、奇声をあげる、椅子にじっと座ってられない
3	能力	慣れればカットは可能で、美容院に行くこともできる。カッコいいヘアスタイルを嬉しく思う感情もある。
4	信念・価値観	自宅で押さえつけられてカットされたり、注意される等、辛い思いをした経験から、カットは怖いと学習し、思い込んでいる。
5	自己認識	自分には問題がない。

出典：南、赤松（2014）「発達障害児をめぐる理美容に関する研究：美容室ピースオブヘアの取り組みに焦点を当てて」『京都光華女子大学研究紀要（52）』に基づき、筆者作成。

このように捉えれば、カットする理美容師側と子ども側から捉えたカットへの意識レベルが異なっていることがわかる。ニューロロジカルレベルは、上位の意識レベルが変わると自然と下に影響が出る特徴がある。つまり自己認識から環境の順にということである。自己認識や信念・価値観が変わることによって、行動や環境も変化が起きる。それによって、今まで問題だと思っていたことが、取るに足りない問題のように思えてくることがあるという。<sup>11</sup>

では、それをどのように解決していけばよいか。ポイントは、相手のニューロロジカルレベルに合わせて相手の話を聴く、相手の価値観、関心事、相手のペースに合わせることで、相手に効果的に反応することが考えられる。相手と良好な関係を確立したいとき、相手の感覚システムに合わせた言葉遣いを意識的に合わせると相手とのペースが合ってくる。このスキルは、NLP（神経言語プログラミング）の「ペーシング」と呼ばれているもので、よりよい関係を築くための第1歩となるスキルである。

それは、視覚優位の人には、支援者も視覚的な言葉に合わせ資料を見せながら話し、聴覚優位の人には聴覚的な言葉を使いながら明確な話し方をすると効果があるという。触運動覚優位の人には、触運動覚的な言葉をゆっくりと噛み砕くように話し、相手の身体反応を見ながら話を進めるとコミュニケーションがスムーズになってくる。相手に「自分のことをわかってもらえた」という気持ちを起こさせ、相手との信頼関係が築かれる。コミュニケーションにおいて、一致し



た言葉、声、態度を使い、相手に反応することは極めて重要なことである<sup>12)</sup>。

発達障害児に対する理美容の場合、言語コミュニケーションが困難な子どもが多く、その意味では、具体的に相手から情報を聴き取ることは難しい。そこで、理美容師の側が、いかに相手のニューロロジカルレベルに一致する言葉遣いや環境を掴み、ペーシングを行うことができるかが鍵になる。スマイルカットでは、そこに意識を向けた実践に取り組み、実際に子どもがスムーズにカットできた例を確かめることができた。次章では具体的事例をとりあげ、有効性への考察へつなげたい。

### Ⅲ. ニューロロジカルレベルを意識した実践例

従来、スマイルカットは応用行動分析の考え方を主に用い、カットができない子ども達へのアプローチを行っていた。応用行動分析は、その名の通り、カットができない子どもの行動、つまり、椅子に長く座れない、じっとしてられない、暴れる等の行動を、カットができる行動、つまり、椅子にじっと座ってカットすることへと変容させることを目的として活用していた。そのために、応用行動分析を用いる際には、「カットが嫌い（もしくは怖い）」という子どもに、その「カットが嫌い（もしくは怖い）」という負の気持ちを上回る快刺激を好子<sup>13)</sup>として、その好子を出現させることにより行動を強化していた<sup>14)</sup>。だが実際には、応用行動分析を用いてのカットの方法のみがスマイルカットを利用する発達障害児全員に100%有効であったかといえ、すべての子どもに適合している訳ではなかった。そこで、新たな糸口を探究する中で、ニューロロジカルレベルの考え方と出合う。子どもは好子が出現するとカットができる行動につながる。このような「行動・振る舞い」に相当するニューロロジカルレベルの意識レベルは「行動レベル」である。

先にも述べたとおり、この行動の変容をもたらすべくするために、ニューロロジカルレベルの考え方を実践に試みるならば「環境レベル」へのペーシングも重要だ。そこで、スマイルカットが試みた実践例を紹介し、そこから環境レベルについても考察していく。

事例1) スマイルカットの体制上の工夫——母親美容

師の接し方から環境レベルを考察する

二か月に一度、ピースオブヘアーでは区内の保育園内でスマイルカット教室<sup>15)</sup>を園児対象に行っており、赤松の他に女性美容師2人が参加する体制である。その2人の美容師は、自身が子どもを持つ「母親美容師」である。

母親美容師達は、応用行動分析を学んだ経験はなく、赤松のアプローチを模倣しながら進めている。しかしながら、赤松が園児を担当するよりもスムーズにヘアカットが行われることが多い。観察していると、応用行動分析を駆使しているのではなく、彼女達の方法は至ってシンプルで、“優しい笑顔と声かけ” “子どもが興味を持ちそうなゲームやDVD” など“楽しい雰囲気”を演出していた。部屋のレイアウトや保護者とのコミュニケーションも気かけ、居心地の良い空間を作っているようであった。そして、彼女達はほぼあらかじめ決められたスケジュール通り、順番に子ども達をカットすることができていた。当該保育園でスマイルカット教室に参加している園児は、ほとんどが美容室でカットをしたことがない、もしくは美容室の店内にさえ入れない、例え店内に入ることができてもカットができなかった子ども達である。

この事例からわかるように、母親美容師の行っていることは、ニューロロジカルレベルでいう「環境」を作っている。こうした彼女達の取り組みから、スムーズにカットできる要素には“カットがしたくなるような楽しい環境作り”がポイントとして挙げられる。

「発達障害児をめぐる理美容に関する研究：美容室ピースオブヘアーの取り組みに焦点を当てて」<sup>16)</sup>には、カットができるまでの回数を表示している。それによると、全98人中90人の子どもは1回目からカットできている。家庭ではカットを嫌がる発達障害児のほとんどが、ニューロロジカルレベルでいう「環境」と「行動」を整えることにより、カットに挑むことができたことがわかる。

では、「環境」と「行動」を整えてもカットができない子ども達は、どうすべきなのか？ 好子と想定して子どもに提案しても、行動契約は結ばれずカットを拒否されることは多々ある。快刺激になっていない場合、快刺激になる好子を他に探すことになるが、それだけで好転することが想像しかねるほど子どもの拒否

反応が強い時もあった。

次に、スマイルカットを利用している子どもの事例を紹介し、別の意識レベルを考察していく。それに伴う倫理的配慮として、事例提供者には研究の趣旨を説明し、個人が特定されないこと、対象者の情報は厳重に管理されることを口頭及び書面で重ねて説明し同意を得ている。

事例2) Aちゃん(女性、11歳、自閉症スペクトラム)の反応から考察する

Aちゃんが児童館でのスマイルカット教室に初めて参加したのは、2010年7月、当時6歳(幼稚園年長組)の時であった。長い髪を一つに束ねたAちゃんは、赤松に一切近づこうとはせずに、「帰りたい」と繰り返しずっと泣いていた。母親によると、当時はカットどころか母親に髪を触られることすら拒否していたようだ。「髪の毛切るのは嫌、絶対嫌」という言葉が口癖で、こだわりも強く、いつもと同じスタイルになるよう髪を一つに束ねることは許容していた。

赤松からAちゃんに近づこうものなら、泣いて外まで逃げていかんばかりに、常に2m以上の距離を保っていた。あの頃の強い拒絶は、「環境」や「行動」の意識レベルの取り組みだけでは解決できなかった。

そこで、Aちゃんの「カットを嫌がる」状況を、ニューロロジカルレベルのさらに上位概念も用いて分析・検証を試みた。

表4での分析からは、幼少期のAちゃんは「環境」や「行動」レベルよりも、「カットが嫌い」という「信

念・価値観」レベルが強く作用しているのではないかと推測できる。

Aちゃんは、保護者の都合もあり約3年間スマイルカットに参加していなかった。3年後、久しぶりにスマイルカットを利用したAちゃんは3年生に成長していた。3年あまりの年月が経っているものの、やはり「髪の毛は切らない」「(他の子どものカットの様子を)見るだけ」の一点張りであった。

この日は、スマイルカット教室参加の前に母親と大好きなマクドナルドでハンバーガーを食べながら、「ニコニコ挨拶をすること」「Aちゃんはカットしなくて良いから、他の友達がカットしているのを見ること」「大きい声を出さないこと」この3点を約束してきていた。これは、カットへの心の距離感を縮めるため母親が試みたものであり、Aちゃんの信念・価値観の意識レベルを少しでも和らげるための補助的な働きになると考えられる。このように事前にスケジュールを伝えて約束(行動契約)をすることにより、Aちゃんは見通しが立ちやすくなる。

スマイルカット教室に入る前段階の母親との約束と、3年の年月がそうさせたのかAちゃんは落ち着きがあり、以前のように泣きながら逃げることはなく、カットへの拒否はあるものの交渉ができる雰囲気であった。事前に母親と「ヘアカットはしなくて良い」と約束をしてから来ていたため、カットへの強引な交渉はできないが、Aちゃんの目の前で赤松自身の前髪を少しだけ切って見せた。

表4 Aちゃんの状況とニューロロジカルレベル

1	環境	【目に見える状況】Aちゃんには、慣れない店内の雰囲気、ドライヤー等の雑音、理美容師の怖そうな表情が映っている。 【考察】「カットは嫌だ」という負の意識レベルを連想さすと考えられるのではないかな。
2	行動	【目に見える状況】理美容師から逃げ回る、「髪の毛を切るのは嫌、絶対嫌」、「カットを嫌がる」行動として現れている。 【考察】「カットは嫌だ」という負の意識レベルを連想させ、それが影響して言動に表れているのではないかな。
3	能力	【状況】能力や才能は目に見えないものなので、表面的には「カットを嫌がる」ことを当てはめにくい。 【考察】Aちゃんは椅子にじっと座ることができ、単語での会話ができる。潜在的能力としては、カット可能な能力はある。カットを薦められていることは理解できている。
4	信念・価値観	【状況】信念・価値観は目に見えないものなので、表面的には「カットを嫌がる」ことを当てはめにくい。 【考察】実際にカットを極度に嫌がり、絶対にしないと言葉にも態度にも表れているので、カットは嫌なもの、痛いもの等という価値感が働いているのではないかな。
5	自己認識	【状況】自己認識は目に見えないものなので、表面的には「カットを嫌がる」ことを当てはめにくい。 【考察】Aちゃんは自分の側には何も問題がないと認識しているのではないかな。

今回は、Aちゃんは大声で泣くことも暴れることも逃げることもなく、反対に少し興味を持ったような表情をした。すかさず赤松が「Aちゃんも切ろうか？」とハサミをAちゃんに向けると拒否反応が出た。

「じゃ自分で切ってみるか？」と声かけをし、ハサミを渡すと自分で切ってみようという素振りを見せていた。危ないので一緒に手を添え前髪1本を切る。それを切った時点で「もう終わり、もう終わった」と繰り返し、その場を去ろうとした。1本切るまでのやり取りには約30分が経過している。カットに対する恐怖心や不快感は相変わらず大きいと思われた。そこで赤松から「痛くなかったやろ？」と問うと「痛くなかった」と返事があった。結局Aちゃんは、その日は前髪1本だけ切ることができ、この日のスマイルカットは終了した。

髪の毛を1本切ることができ、それが痛くない行為であることがわかったことで、Aちゃんは見通しが立ったのか、2か月後(3回目)のスマイルカット教室では、本人より「前髪を10本切っても良い」との言葉があり、約10本の髪を切ることができた。さらに4か月後(4回目)には前髪全体を切ることができた。

これは応用行動分析のスモールステップにあたり、全頭のカットというゴールの途中に複数のゴールを作って、少しずつできることを増やしていく、できたことを褒めて自信を付けていき、次のステップへの見通しを立てやすくして、最終的に全頭カットにつながる有効な方法である。

幼少期からのAちゃんの「信念・価値観」のレベルに存在していたカットへの恐怖心は、前髪カットができたことにより少しだけ和らいだようだった。4回目は、前髪全体をカットして終了した。そして、次回は後ろの髪も切ることを約束してAちゃんは帰宅した。

この「次回の約束」も大切である。ニューロロジカルレベルの3)能力に当てはめて検証すると、Aちゃんは、本当は全頭のヘアカットをしないといけないことは理解している。理解はしているが恐怖心などから踏み込めないと推測される。「今回のゴールは前髪カットだったけど、次回は全頭のカットがゴールだよ」とイメージができるよう声をかけて支援すると、Aちゃんは約束をきちんと覚えている。実際には約束通りできないこともあるが、ゴールのイメージができている

ことでチャレンジしやすくなり、約束を守るために頑張ろうとする。

5回目のスマイルカット教室でも、事前に工夫を施した。実施前に母親に協力してもらい、カットは怖くないとイメージできるように伝えてもらう。本番ではAちゃんに後ろ髪のカットにチャレンジしてもらおうと、まずは応用行動分析を活用して働きかけをした。Aちゃんには、母親の働きかけやこれまでの経験から「カットをすることは、それほど怖いものではないのかも」という、少しの意識変化があったと思われる、これまで以上にスムーズにスタートできた。Aちゃんに好子を示して行動を強化していく。好子はチョコレートとし、カット時間は5分と見通しを立てることで、行動契約が成立した。5分でもAちゃんは辛そうな表情をしていたが、この日は後ろの髪のカットに成功した。ついにAちゃんは、5回目に全頭カットができた。Aちゃんは、カット終了後、約束のチョコレートを食べられて、母親から褒められて満足気であった。

その後のAちゃんの様子は確実に変化した。6回目からは漫画の切り抜きを持ってきて、自分のヘアスタイルのオーダーをするようになり、カットを楽しむようになった。さらに、自宅で自分の髪を切るほどカットに興味を持つようになった。前髪を短く切ってしまつて「赤松さんに髪を伸ばしてもらおう」と言ってきたこともあった。今まで理美容師に髪を切ってもらった経験がなかったために、Aちゃんの中では理美容師は髪を自在に伸ばしたり短くしたりできる存在と思っていたようだ。

5回目までは5分座っているのが限界だったAちゃんは、6回目は15分ほど座ってカットができるようになっていた。7回目となったある日、ヘアカットが終わり鏡を見せると「もっと切りたい」と言ってきた。母親に「また15分座らなあかんよ」と言われたがAちゃんは「切る!」と主張し、結果的に一度も立ち上がることなく、30分座ってカットをした。

Aちゃんは、ヘアスタイルが変わっていくのを楽しんでいるようになっていた。母親も幼少期以来のショートスタイルのAちゃんを「かわいい」とにこやかに褒めていた。

これらのことから、Aちゃんの「価値観」の中の恐怖心を取り払われ、カットを心から楽しんでいる様子がみてとれる。



回数 日付		Aちゃんの様子
1回目	2010/7/12	「髪の毛切らない」「絶対しない」という言葉があった。理美容師に近よらない。
2回目	2013/7/29	3年ぶりのスマイルカット。1本切れた。
3回目	2013/9/29	本人から「前髪10本だけいいよ」という言葉。結果、10本切れる。
4回目	2014/1/20	前髪全体が切れた。
5回目	2014/3/3	後ろ髪全体が切れ、結果的に全頭カットができた。
6回目	2014/5/19	15分間座っていただけるようになった。
7回目	2014/7/7	本人から「切りたい」という言葉。30分座って切れるようになった。また、ヘアカタログまで持参。美容を楽しんでいる様子。
8回目 9回目 10回目 11回目	2014/9/1 2014/11/10 2015/1/19 2015/2/23	7回目同様、順調にカットできている。Aちゃんは美容を楽しみ、今では理美容師がカットしても嫌がる様子はない。

図2 Aちゃんが全頭カットできるまでのプロセス

#### Ⅳ. 考察

以上の事例からは、カットのできない子ども達がカットできるようになるための解決法として、ニューロロジカルレベルを用いて意識レベルを改善する方法に一定の有効性を見出せたと考える。Aちゃんのカットへの恐怖心である「信念・価値観」は、目で見えるものではない。実際に全頭カットができたときに、恐怖が和らいだことを掴むことができ、そこで初めて他者にも目に見えて理解できることである。前髪カットができたことや母親の声かけで恐怖心が消えたかは断定できるものではないが、結果として全頭カットができ、そこへとつながるプロセスを辿って来たのは事実である。

今回はあくまで少数事例を用いての試論だが、目で見えてわかる「環境」「行動」の意識レベルを整えることにより、「利用者の大部分は、数回のチャレンジの後にはカットができる確率が上がる」と考察できる。この二つの意識レベルへのペーシングで解決できない子どもには、「信念・価値観」の意識レベルに目を向けることが肝要ではないか。

この「信念・価値観」の意識レベルは、子どもにより様々である。のべ954人（2015年8月末現在）の子ども達のスマイルカットを担当し、カットができない子ども達とその保護者と関わってきた中で、「環境」や「行動」レベルのアプローチで1回目もしくは2回目からカットができる子どもは9割以上であった。残り1割弱のカットができない子どもの保護者に幼少期のヘアカットの話を知ると、泣いて嫌がっていても無理やり押さえつけてカットしていた経験がある人が非常に多かった。幼い子どもは何でも「イヤイヤ」と拒否するきらいがあり、親としてはその拒否を毎回受け入れるわけにはいかず、拒否していても、10分か20分程なら泣き叫ぼうが押さえつけて髪を切ってしまうのである。

子どもにとって、押さえつけられ髪を切られたことで「信念・価値観」に恐怖心が植え付けられた可能性がある。また、切れ味の悪いハサミやバリカンでカットをすると、髪にハサミやバリカンが引っかかり痛みを感じる。幼少期に押さえつけられて恐怖心のある中、さらに痛い思いをしようものなら、子どもにとってのカットに対する「信念・価値観」の意識レベルは、拷



問をされているような感覚である可能性もあるかもしれない。

## V. おわりに

以上、本稿ではピースオブヘアーが行うスマイルカットの実践事例をもとに、ニューロロジカルレベルの有効性に着目して論じてきた。

上位概念である「信念・価値観」の意識レベルに正の好転があれば、自ずと「行動」の意識レベルにも変化がみられ、それまで難しかったことが可能になる実践が実際にあることが検証された。子どもにも理美容師にも目に見えるレベル、「行動」や「環境」の意識レベルで相手にペーシングしていくことは勿論のこと、「信念・価値観」の意識レベルにどうアプローチしていくかで、カットができる子どもは増えていくのではないだろうか。また、幼い頃に「カットは怖い」「カットは痛くて嫌なものだ」という意識が植え付けられたことで長らくカットの拒否が続くのであれば、幼少期の家庭や利用している福祉施設等でのこうした事象への理解が極めて重要であろう。“少しの時間だから、泣いていても押さえつけてカットすればいい”といった周囲の大人の対応が、心ならずも、子どもの衛生状態の保持に加え、子どもがもっと早くから経験できていたはずのカットする嬉しさ、ヘアスタイルを楽しむ喜びから子どもを遠ざけてしまう遠因になってしまうかもしれないからだ。

今回はあくまで少数の実践事例から有効性を一考察したに過ぎないが、実践を重ね、ニューロロジカルレベルとスマイルカットの関連性を今後も精査していきたい。さらには、本アプローチができる理美容師を増やしていく一方で、幼少期の家庭や福祉施設等で子どものカットにどう対応していくと良いかを長期的視野に立って理解できるような支援が必要ではないだろうか。

本稿が、今後、発達障害児のカットが理美容店で当たり前にできるようになる一助となれば幸いである。

## 注

- 1 京都市伏見区にて美容室「Peace of Hair (ピースオブヘアー)」のオーナーとして経営に携わる傍

ら、2010年より発達障害児のためのヘアカット「スマイルカット」を立ち上げ、発達障害児のカットに従事する。発達障害児の親の会、理美容師、福祉専門職のネットワークを生かし、2014年4月に「特定非営利活動法人そらいろプロジェクト京都」を設立、市民活動の側面からも、発達障害児支援に携わる。

- 2 発達障害者支援法において、「発達障害」は「自閉症、アスペルガー症候群その他の広汎性発達障害、学習障害、注意欠陥多動性障害その他これに類する脳機能の障害であってその症状が通常低年齢において発現するもの」と定義されている。
- 3 南、赤松 (2014) 「発達障害児をめぐる理美容に関する研究：美容室ピースオブヘアーの取り組みに焦点を当てて」『京都光華女子大学研究紀要 (52)』PP.141
- 4 発達障害情報・支援センター (<http://www.rehab.go.jp/ddis/> 発達障害を理解する / 発達障害とは /) 20150904 取得
- 5 南、赤松 (2014) 『同上書』、pp.141
- 6 南、赤松 (2014) 『同上書』
- 7 赤松を指す。
- 8 日本 NLP 協会 ホーム ページ (<http://www.dickballard.com/?p=1683>) 20150909 取得
- 9 田中ちひろ (2013) 『悩みの 9 割を消す技術』ダイヤモンド社、pp.16
- 10 千葉英介 (2003) 『心の動きが手にとるようにわかる NLP 理論』明日香出版社、pp.150
- 11 千葉 (2003) 『同上書』、pp.152
- 12 梅本和比己 (2006) 『苦手意識は捨てられる』、中経出版、pp.177～182
- 13 応用行動分析において、反応の直後に提示されるとその反応の将来の生起確率を高めるような刺激・出来事・条件をいう。
- 14 南、赤松 (2014) 『同上書』、pp.147-149
- 15 伏見区内の保育園、児童館、特別支援学校合計 3 か所で定期的に行われるスマイルカット。そこへ通う子どもが利用している。
- 16 南、赤松 (2014) 『同上書』、pp.147

## 引用参考文献

- 千葉英介 (2003) 『心の動きが手にとるようにわかる NLP 理論』 明日香出版社
- 福島裕人 (2010) 「ラフター (笑い) ヨガの集団心理療法としての可能性: ラフターヨガからセラピューティックラフターヨガへ」 『笑い学研究 (17)』 pp. 75-82
- 発達障害情報・支援センター (<http://www.rehab.go.jp/ddis/>) 発達障害を理解する / 発達障害とは / 20150904 取得
- 堀井恵 (2007) 「Nursing Lecture (41) 神経言語プログラミングの実際とケア -- 医療現場で使われる NLP」 『月刊ナーシング 27 (7)』 pp. 102-109
- 石井孝治 (2000) 「神経言語プログラミング (NLP) を活用した「部下との新しいコミュニケーションの持ち方」 (3・完) グループ・ファシリテーター研修」 『企業と人材 33 (743)』 pp. 34-39
- 石井 孝治 (2000) 「神経言語プログラミング (NLP) を活用した部下との新しいコミュニケーションの持ち方 (2) GOALS 研修」 『企業と人材 33 (741)』 pp. 50-55
- 石井孝治 (2000) 「神経言語プログラミング (NLP) を活用した「部下との新しいコミュニケーションの持ち化方」 (1) ペーシング & リーディング研修」 『企業と人材 33 (739)』 pp. 60-65
- 加藤聖龍 (2013) 『たった今から人生を変える NLP の法則』 リベラル社
- 加藤雄士 (2012) 「ニューロロジカルレベルのセッションの有効性について」 『産業論集 (39)』 pp.61-77
- 河野政樹 (2012) 「災害・事故後の PTSD に対する神経言語プログラミング (NLP) による治療経験」 『広島医学 65 (8)』 pp. 561-564
- 河野政樹 (2001) 「過敏性腸症候群 (子どもの心のケア問題を持つ子の治療と両親への助言) -- (各論子どもの心への対応)」 『小児科臨床 54』 pp. 1359-1366
- 小山敦子、保田佳苗、平野智子、岩上芳、長野京子 (2003) 「問題解決志向型アプローチが奏効した腹痛発作を繰り返していた 1 例」 『日本心療内科学会誌 7 (1)』 pp. 13-17
- 村松 智美、河野政樹 (2010) 「NLP (Neuro-Linguistic-

Programming 神経言語プログラミング) を用いた心理的アプローチ (一般演題, 第 46 回日本心身医学会近畿地方会演題抄録)」 『心身医学 50 (5)』 pp. 408

- 南、赤松 (2014) 「発達障害児をめぐる理美容に関する研究: 美容室ピースオブヘアの取り組みに焦点を当てて」 『京都光華女子大学研究紀要 (52)』
- 中村美美子 (2003) 「交流分析と NLP (神経言語プログラミング: 両者の理論的特徴とその活用 (第一報)」 『プール学院大学研究紀要 43』 pp. 113-126
- 日本 NLP 協会ホームページ (<http://www.dickballard.com/?p=1683>) 20150909 取得
- 梅本和比己 (2006) 『苦手意識は捨てられる』 中経出版
- 白井 幸子 (2002) 「交流分析と NLP (神経言語・プログラミング): 両者の理論的特徴と臨床への応用」 『テオロギア・ディアコニア = Theologia Diakonia 35,』 pp. 75-90
- 櫻井佐紀子 (2002) 「根拠のない不安及び原因不明の腹痛を訴えるクライアントに対する催眠アプローチ - NLP (神経言語プログラミング) 技法の併用によるエリクソン催眠の実践」 『臨床催眠学 3』 pp. 22-27
- 白井幸子 (2001) 「交流分析と NLP (神経言語・プログラミング): 両者の理論的特徴と臨床への応用」 『テオロギア・ディアコニア 35』 pp. 75-90
- 多摩府中保健所 (2013) 『支援者のための地域連携ハンドブック～発達障害のある子供への対応～』
- 山崎啓支 (2012) 『マンガでやさしくわかる NLP』 日本能率協会マネジメントセンター
- 山崎啓支 (2009) 『「人」や「チーム」を上手に動かす NLP コミュニケーション術』 明日香出版社

## 追記

本稿の執筆に際し、スマイルカットを利用されている子ども達・保護者の皆様、ピースオブヘアのスタイリストの皆様、スマイルカットを育てていただいた関係各位に心から感謝申し上げます。